

1994年4月、内戦で引き起こされた混乱は落ち着き始めたが、それでも社会的には不安定な状態が続いていた。とりわけ選挙で選ばれた西部出身のリスバ大統領に、大統領選挙で敗れてそれまで第三勢力となっていた南部出身のコレラ氏（ラリー族）が合流したことによって、政権の座を奪われた北部出身のサスー前大統領との対立が決定的となった。そのことにより、国を二分する北と南の対立がより顕著になった。さらにそれぞれに「Cocoyes」（リスバ）「Ninjas」（コレラ）「Cobras」（サスー）と呼ばれる私兵を抱えたままだったので、政治的にはより一層緊張した状態となった。そこへ追い打ちをかけるかのように、フランスがフランスフランに対して固定レートであった現地の通貨を切り下げたので、すでに悪化していた国の経済にさらなる打撃が加わった。

コンゴで使われている通貨は、中部アフリカ諸国銀行（加盟国：チャド、中央アフリカ、カメルーン、ガボン、コンゴ共和国）が発行する Franc cfa だが、1958年からずっと1フランに対し50cfa だった。ところが1994年1月、50%の引き下げが発表され、一気に1フランが100cfa になった。日用品の多くを輸入に頼っている国にとっては大きな痛手となった。

この通貨引き下げは、教会本部から助成金を受けているコンゴブラザビル教会にとっても無関係ではなかった。急激なインフレはコンゴ人の生活に直接的な打撃となったので、本部側としても助成金の増額を検討しなければならなかった。ところが、この切り下げの影響は別の形で現れたのだった。

そもそも教会助成金は銀行送金という形で行われていたが、その際にはフラン立てで送金されていた。したがって、それまでと同じ金額を送ると、通貨の切り下げによって、現地では2倍の送金額を受け取ってしまうことになる。物価の上昇を受けてその分を増額したとしても、2倍とまではいかない。だから、多くなる分は差し引くこととなった。つまり、送る側は減額になり、受け取る側は増額となる。本来は双方にとって、都合の良い話であった。しかしその助成金は、種々の事情からパリに在住するノソング氏の家族がフランで受け取るようになっていたので、フランとしては減額となり、新たな問題となった。

一方、教会ではノソング氏は、1979年に政府に寄贈した教会前にある新「憩の家」診療所を、再び天理教の運営の下で再開するように働きかけていた。常駐の日本人布教師がいなくなり、近隣の教会に対する評判が落ちていく中で、何か社会的に認められるような活動を模索していたのかもしれない。ノソング氏の説明によれば、政府からの正式な依頼があったということに加え、この診療所には「TENRIKYO」の文字が入っており、そこで十分な活動をしないと天理教全体のイメージダウンになるということだった。実現に向けて彼は、厚生大臣を動かして、診療所の返還のための公式文書まで準備していた。

1994年10月、当時の高部正雄アフリカ課長と高橋利行部員が一週間の滞在予定でコンゴに出向いた。前年9月、高橋氏が内戦直後の様子を見に行ってから1年の歳月が過ぎていた。（もっとも94年4月にコンゴに行くはずだったが、コンゴ入国ビザが発給されずこの10月になった。ビザが発給されなかつ

た理由は、必要書類が不十分であったということだったが、その裏ではノソング氏の働きかけがあったようだ。）

この時の滞在報告には当時の政情については、以下のように記されていた。

「現在、外国、国際機関の援助、借款にも拘わらず、国家財政は窮地に陥り、公務員給与の大幅な遅配が続く。コンゴ情勢は非常に流動的。公立の教育機関は満足に機能していない。リスバ大統領の指導力が信頼を失ってきていることはメディアを通して明らか。もし、今度大統領選をすれば、野党の盟主コレラ氏が勝つだろう。しかしながら選挙は巨額の費用がかかるので、不可能。政権交代の方法はクーデターしかない。先の内乱後の武装解除が成されないままであり、再び暴動、内乱が起こる可能性は十分にある。」

実際、その後2回目の内戦が勃発し、軍事クーデターという形で政権が交代した。

またこの滞在中には、二つの特筆すべき出来事があった。一つは「蟻塚騒動」である。草刈りなど十分な手入れをしていなかったため教会横の広場の真ん中に、大人の背の高さくらいの蟻塚ができていたが、ノソング氏はそれを特別扱いしていた。彼の説明によれば、彼の母語であるラリー語で蟻塚のことを「kisama」と呼ばれ、その発音は「Oyasama」の「sama」に通じており、教祖のお働きの現れであるということだった。実際、教会の基壇と蟻塚の間には砂利が敷かれた特別な道がつけられてあった。彼は、基壇の上のテラスからその道に直接に降りられるように、テラスの欄干を取り除きたいと申し出た。もちろん、こうした要望に本部として応じることはなかったが、蟻塚はその後も祈りの対象とまではなっていなかったものの、大切に管理し続けたようである。

またもう一つは、ノソング氏が辞表を出したことである。提出された一枚の紙には「下に署名せし仕儀、天理教教会長は、本日、コンゴにおられるアフリカ課長にコンゴの教会長として辞任を願い出るものです。」と書かれてあり、辞任の理由として、「永年来の難しい事情」とだけ記されていた。これまで、話し合いの中で何度も辞意を表明したことはあったが、文書にして提出されたのは初めてだった。

当時の教会内では、信仰の第2世代が中心的な役割をしていた。おぢばで研修を終えたノソング氏の長男やバゼビバカ氏（現コンゴブラザビル教会長）、さらにそこへノソング氏の三女夫婦も加わり、ノソング氏自身も自分の後継者についていろいろ考えるようになっていた。折しも、本部のコンゴ関係者の間では、3年後に迫っていた教祖百十年祭を前に、コンゴ伝道の将来を考えるなら、次世代の育成が急務だと話し合われていた。また教会の新たな出発を期して、ノソング氏が「勇退」をし、教会の第一線から退いてもらうための手段が模索されていた。

将来像がまだまだ不透明な状態の教会ではあったが、政情不安定な社会の動向とあたかも呼応するかのように、少しずつ変化の兆しを見せ始め、次代の到来を予期させていた。しかし、その社会自体が、やがて迎えることになるさらに大きな内戦へ突入する秒読み段階に入っていたのだった。